

上演台本

「うかうかと終焉」

作：出口明、大田雄史
(芝熊 (shiba-kuma))

登場人物

- ・西島伸太郎（にしじま・しんたろう） 4回生。神戸へ行く。標準語。
- ・前野中吉（まえの・ちゅうきち） 4回生。新潟の実家へ戻る。エセ関西弁。
- ・渡辺美月（わたなべ・みつぎ） 2回生。京都に残る。標準語。
- ・児玉佳奈枝（こだま・かなえ） D2。東京へ就職。京都弁。
- ・美濃部さな子（みのべ・さなこ） 10回生。進路不明。九州弁らしきもの。関西弁が混ざる。
- ・村井（むらい） 4回生。初任地は和歌山。
- ・館内放送（声）

現代。ある古い学生寮と、その一室。

舞台奥には廊下へのドアと窓（すりガラス）。下手には庭が見える大きな窓。

窓の外には桜の木。

上手には部屋が続くらしく、通路があり、暖簾で間仕切りされている。

下手には本棚と簡素な勉強机。ラジオがある。本、教科書、雑誌類が無造作に積んである。

中央にコタツ、座椅子があり、上手奥には二段ベッドがある。布団がたたんである。ゲーム、ヤカン類なども転がっている。多少のごみもあるかもしれない。

整理整頓されているとはいえないが、汚くはない。

トイレや風呂は共同らしく、この部屋には見えない。炊事場や洗濯機も廊下にあるため、部屋の中にはない。冷蔵庫は部屋の中にある。

部屋の壁一面には落書きがある。

旧漢字で達筆に書きつけられた短歌や辞世の句。警句のもじり。荒々しく独特の書体で遠慮なく書かれたアジテーション、真偽不明の英語、フランス語、アラビア語めいた文字もある。五線譜や、コード進行が書かれた歌詞なんかがあってもいい。長いものもあれば、一言だけのものもある。

窓の上の壁には、「さよならだけの人生か」など書いている。正面には「月月火水木金」など。

あまりに大量のメッセージが書いてあるので、書き加えるスペースがないほどだ。

それらは寮を去った人々の、別れのメッセージの集積だ。

老朽化により、寮は取り壊されることに決まった。

寮自治会は大学側と交渉しているが、旗色は悪い。この部屋の壁にも、連帯を求める自治会のビラが貼られている。

寮生たちは、行く先が決まったものから順に、めいめいに退寮していく。

寮の最終日が一週間後に近づいている。

各曜日、一人ずつ人が減っていく。

暗転。

不思議な音楽とともに、壁の文字がいくつか、不気味に光り始める。

そこに何人かの人の気配、懐中電灯を手にしている。

壁の文字の光はまるで脈打つかのように明滅しながら、少しずつ強まり、増えていく。

呼応し音楽もテンションを増していく。その最高潮。

部屋の電気がつき、文字の光、静まる。

前野がこたつに乗り、電球をつけかえている。懐中電灯で手元が照らされている。つけかえが成功したので、パツと明るくなったのだ。

伸太郎の部屋である。こたつの上の前野。古い方の電球を受け取った児玉。ドア横の電気スイッチを押した様子の渡辺。3人とも電球を見ていたため、まぶしさに一瞬うろたえる。前野、こたつから降りる。

渡辺 「すみません。ありがとうございます」

前野 「おーよかった、ついた。」

児玉 「これ何ゴミかな？」

前野 「ん、ああ」

渡辺 「もらいますよ」

渡辺、児玉から古い電球をもらう。もらうが特にどうするわけでもなく、ちょっと眺めた後、ただ持っている。

前野 「そつち。持ってもらえます？」

と児玉に言ったのは、電球が切れる前まで麻雀をしていたからで、暗闇の中で彼らは牌をシートごと床に移動させていたからである。前野と児玉、シートを持つ。慎重に台にのせようとするが、明るいところではうまくいかず、崩れる。

児玉 「流そう。流そう。」

前野 「いいっすよ。」

児玉 「(渡辺に) いいよね？」

渡辺 「はい」

先ほどまで美濃部という者もいたのだが、どっかに行ってしまった。

前野 「あれ、美濃部さんいねえ」

児玉 「部屋に、いない？ さなこー？ (隣室をのぞき) ……いない」

渡辺「たぶん、ふらっとどこかに。出ていく気配が」

前野「ああ、自由やなあ」

児玉「そう。…停電かと思ったね。」

渡辺「電球だったみたいですね。ほら（と電球を振る）カラカラ鳴っている。」

児玉「よう見つけたね。代わりに電球。」

渡辺「え、ああ」

前野、灰皿を探す。灰皿はすぐに見つかるがタバコが見つからない。自分の部屋に置いてきたことに気づき、部屋を出る。出たところで誰かに声をかけられる。

以降、廊下での会話はすりガラスの向こう側で行われ、人影が見えたり見えなかったりする。

村井の声「中吉!」

前野の声「おう、どうしたん。」

村井の声「部屋が、部屋が暗いねん」

前野の声「え?お前の部屋もか? ここもさっき電球切れたんや」

村井の声「ちやうねん。電球がないねん」

前野の声「あ?」

村井の声「電球ごと無くなっとんねん」

前野の声「はあ?」

二人の声、遠ざかる。

児玉は前野が用意した灰皿を窓の側に置く。渡辺ちよつと笑うと、児玉も少しだけ微笑む。

児玉「ね」

児玉、牌をジャラジャラとまわし始める。渡辺、電球を持ったまま。

渡辺「何ゴミなんですかね」

児玉「ね」

渡辺、ひとまず畳の上に置く。

渡辺「踏むか」

渡辺、電球を灰皿に置く。渡辺、児玉を見る。

児玉「いいよ。たぶん」

前野、入ってくる。すでに1本くわえている。灰皿が置いた場所がない。窓際に見つめる。ライターをコタツに置き、灰皿を取りに行く。その間、児玉がライターを隠す。

前野、ライターがないことに気づき、

前野「ちよい。ライター。どっち？」

児玉「どっち？」

渡辺「どっち？」

前野「……渡辺」

渡辺「ブー」

児玉、ライター取り出し、窓際に滑らせるように投げる。前野、拾いに行く。

児玉「外で吸いーや」

前野、窓を開ける。風の音。

前野「さむ」

渡辺「さむ」

前野「夜は全然寒いな。昼間は温いのに」

渡辺「開花宣言したんですたっけ？あれ？」

前野「(外を見て) まだやで。」

児玉「今年は、見られへんねえ。桜。」

前野「間に合いませんでしたねえ……」

風の音。

前野「さむ」

児玉「はよしめーや」

前野、窓を閉める。風の音、やむ。

渡辺「児玉さん、いつ引っ越しでしたっけ？」

児玉「明日。火曜日にした。」

渡辺「ああ。いつからなんですか、仕事」

児玉「来週の月曜日。4月1日(ついたち)からもう研修だって」

渡辺、嫌そうですねと肩をすくめる。

児玉「ね」

児玉「荷造り、大変だったでしょ？ ごめんね、手伝えなくて。」

渡辺「全然、ほんと。まあ伸太郎が手伝ってくれたので。私少ないですから、荷物。2年だと、あれっぼっち。」(と、ドア近くにある自分の荷物を指す。)

前野、タバコに火をつける。

児玉「はー？怒られるよ」

渡辺「たぶん大丈夫です。あの人も吸ってるんで、部屋で。」

児玉「吸うんだ？」

渡辺「吸います」

前野「おお、バレてたんか…」

児玉「うそ。知らなかった。知ってた？」

前野「知ってたっていうか、あいつにタバコ教えたの俺やし」

渡辺「中吉さくん、それホント？(前野に怖い顔する)」

前野「ウソウソウソ」

児玉「4年も隠して。伸ちゃんすごいね」

渡辺「私には、バレちゃってますけど。2年で。」

児玉「嫌いやもんね、タバコ」

渡辺「ニオイが嫌で」

前野「カッコつけて吸うとんねや。ふかしとるだけやもん。似合わんよなあいつ」

児玉「中吉くんも似合ってるやね」

前野「え(やや傷つくも吸い続ける)」

児玉「何で気づいたん？」

渡辺「卒論がやばいとかで洗濯頼まれて。そしたら服がすごく臭くって。ポケットにタバコの、茶色い粉？いっっぱい。」

児玉「は！ 中学生がバレるやつやん。洗濯くらい自分でやらなあかんよなあ。」

渡辺「ツメが甘いんですよ」

児玉「…私も一本もらってみようかな。」

渡辺「えく児玉さんが。ちょっと見てみたいかも。」

前野 「やややや。やめといたほうがいいですよ。あの、僕みたいになりますよ。」

児玉 「くわえるだけ、くわえるだけ」

前野 「いやいや」（背中に隠す）

児玉 「記念にさ」

前野、「危ない危ない（吸いさしを灰皿に置き、本気でガードする）」

児玉 「ええやんええやん、減るもんやなし。一本だけ！一本だけ！」

と、部屋中を追いかける。前野、軽快に逃げ回る。が、部屋の隅に追いやられ・・・

前野 「渡辺、パス！ ワンツーワンツー」

と、渡辺にパスし折り返しを要求する。が、渡辺、すぐに児玉に渡してしまう。

児玉 「ふっふっふっふ」（箱を開ける）

前野 「いや、ホントにあかんで！」（と、うばう）

前野 「・・・体に悪いっすから」

渡辺 「ちえ」

児玉、灰皿の吸い殻に気づき、拾い上げる。ゆっくり口元に持っていく、前野の目の
のぞき込む。

児玉 「ま、やめとくわ」（と、タバコをもみ消す）

児玉 「（座りながら）百害あって一利なしやもんね」

渡辺 「中吉さんの吸いさしだから、百一害ですね。」

前野 「なんやそれ！」

児玉 「伸ちゃんもやめたらいいのにね〜」

渡辺 「やめてほしいって言ったんですけどね。やめられないみたい。」

児玉 「（ややバカにして）意志薄弱やなあ」

渡辺 「やめたって口だけで。バレバレですけどね」

前野 「バレへんようにがんばってたけどね。めっちゃ換気するし。窓の外で吸うし」

渡辺 「（明るく）明日からは好きに吸ってください。私もいなくなるんで。」

短い間。

廊下で人の歩く音。そして話し声。

村井の声 「な、俺の電球知らん？ 部屋に戻ったら暗いねん。電球無くなってんねん。・・・いや切

れたんやなくてな、なんか電球ごと外されてて。ちょっと買い物行っただけやねんで…」

村井の声、セリフ途中くらいで上手に消えていく。

部屋の中の三人、息をひそめている。

前野、電球を指さし渡辺に、

前野 「これ、村井のっしょ？」

渡辺 「…知—らない」

前野 「どこにあったんや、これ」

渡辺 「なんか、落ちてた。天井に。」

前野 「どこの天井や？」

渡辺 「大変だったんですよ、取ってもよさそうな部屋探すの」

前野 「村井っぽい光り方やなあ〜」

と、前野、横になる。

渡辺と兒玉、麻雀牌でピラミッドを作って遊んでいる。

兒玉 「美月ちゃんは近いんやっけ？ 新居」

渡辺 「自転車で15分くらいです」

兒玉 「いいねえ。(時計に目をやり、) 不動産屋、大丈夫？ 鍵とか」

渡辺 「それは、もう」(と、鍵を出す)

兒玉 「ああ」

渡辺 「準備万端です。」

と言うも、渡辺は部屋を出る気配がない。

兒玉 「中吉くんはいつ引っ越し？」

前野 「水曜日です。あさって。」

兒玉 「お。(指さし) 月、火、水やん。」

渡辺 「伸太郎は、木曜日っていってました」

兒玉 「ほんま？ すごいね。うまいことばらせるもんやねえ。」

前野 「あいつのが後なんか。あいつのほうが先に出ると思ってたわ。」

廊下の館内放送が流れる。

館内放送 「えー村井です。109号室の。あの、電球がないんですけど。荷造りができなくて困

っています。とった人返してください。お願いします。部屋にいます」

前野、座布団を丸めて枕にし仰向けに寝る。電球をいじっている。

渡辺「あ」（ピラミッド崩してしまう）

児玉「あー。昔の人つてすごいね」

前野「整理するとだ。まずだ。なぜ村井がイチマルキューなんだ。イチマルキューつてあれでしょ」

渡辺「渋谷の」

前野「そう。まずそれ。そしてだ、こんなことで寮内放送使うな。」

児玉と渡辺、うなずきはしないが同意である。

前野「そしてだ。部屋で待つな。暗いのに。食堂にいる。まあ、でも、うん。…明るいついていなー」

児玉「なー」

渡辺「ねー」

ドア、開いて美濃部入って来る。風呂帰りのようだ。髪が濡れており、パジャマと寝間着の中間のような服にドテラを着て、ケロヨンの洗面器を持っている。全体的にフアッションがおかしい。ドテラの背には缶コーヒーのボスを模した美濃部のイラストが刺繍されている。これはすでにこの寮から巣立った若者たちが世話になった美濃部に贈ったものである。

美濃部「（明かりが）あ、ついとるついとる。…苦勞」

前野「美濃部さん。もしかして…」

美濃部「おう。ひとつ風呂、浴びさせてもらたばってん。（麻雀牌を見て）あれ、麻雀終わった？」

児玉「流しちやった。まずかった？」

美濃部「よか、よか。でも来てたんよ、チューレンポウトウ」

前野「うそ！すんません」

美濃部「よかて。また来るやろ。」

児玉「じゃあ、今日はお開きにしようか？」

美濃部「おう。（渡辺に）あ、でも、最後までやりたいよな。今日最期やもんな。」

渡辺「いいです。もう遅いですし。楽しかったです。…片付けましょ」

児玉「ほな、片付けよか」

麻雀牌を片付け始める。

児玉「お風呂すいてた？」

美濃部「おう。でらすいとった。貸し切り状態よ」

児玉「うそ、行こうかな。」

渡辺「結構、引越しましたもんね」

美濃部「うむ。寮全体が貸し切りになる日も近いのう。ガハハ。：村井ほんとに部屋におった。暗ーい部屋に一人で。誰がとったんかいなあ」

前野、渡辺を見ながら。

前野「ほんま、誰なんやろなあ」

渡辺「知ーらない？」

と渡辺言うが、ちゃぶ台の下からゆっくり古い電球を出す。

美濃部「ガハハ！よかよか！今日出ていくとやけん。やり逃げたい。のう」

児玉「あと一週間もないのに、新しい電球買っても勿体ない勿体ない」

美濃部「ほんなこと。(電球に) お前もあと一歩、辛抱が足らんやったな」

と、美濃部が自室に向かうのを呼び止めて、

渡辺「美濃部さんにはほんとお世話になりました」

美濃部「なんもしとらんって。あ、餞別やらなあ」

渡辺「いや、いいですよ」

美濃部「気持ちやから」

と美濃部、一瞬考えた後、持っていた洗面器を渡し、

美濃部「気持ちやから、お古ですまんけど」

児玉「もらつとき」

渡辺「ありがとうございます」

美濃部「ほんとは漫画とかあげたかったとやけど、みんな先に持っていったけんな。後輩だけで9学年もおったから」

渡辺「十分です」

美濃部「中吉(と呼ぶ)」

前野「はい」

前野、美濃部の肩などをマッサージし始める。なれた手つき。

渡辺「私が最初に出るとは思いませんでした。」

美濃部「まーここも今週までやし。かわんないかわんない」

渡辺「美濃部さんを、ちゃんと、送り出したかったです。」

美濃部「よかよか」

渡辺「ほんとに。…いつ出るんですか？」

美濃部「ん。…そうなあ。あーそこそこお（と前野に）。…できれば最後に出たいけどな」

前野「金曜日、間に合います？ 工事始まって、居座ってたりして。」

伸太郎入って来る。手にはコンビニ袋、電球を買ってきている。

伸太郎「ついてる」

児玉「かわりのが見つかったんよ」

伸太郎「袋から新品の電球を取り出し」買ってきたのに」

美濃部「おーお疲れさん。まあいつか使うやろ」

児玉「いつかかっていつよ」

美濃部「新居で使え。」

伸太郎「お茶。いる人？」

皆、手をあげる。

前野「紅茶の人。はい。お茶4、紅茶1」

伸太郎、ティファールを持って廊下に行く。その際前野を踏んづける。

伸太郎「飲む人。コップ」

前野・美濃部・児玉、それぞれの部屋にコップを取りに行く。渡辺の分はこの部屋にあるのだ。伸太郎、水を入れて戻り、机に置く。お茶の葉と急須を準備する。美濃部の部屋からドライヤーの音。

渡辺は麻雀牌を片付け始める。

間。

伸太郎「切りのいいところで出よう。出にくくなるし」

渡辺「名残惜しくて」

伸太郎「もう遅いし」

渡辺「わかってる」

伸太郎「・・・。書いた？」

渡辺「何を？（と返すがわかってはいる）」

伸太郎、壁を指さす。

渡辺「だって卒業じゃないし」

伸太郎「・・・」

渡辺「私だけ、2年だし」

と、前野戻ってくる。お洒落なティーカップ（お皿付き）を持っている。

前野「エルメスや。（伸太郎に小突かれ）、昨日出てった奴からもろたんや。ええやろ。」

伸太郎「あほ。荷物増やして」

と、児玉戻ってくる。前野とぶつかり、

前野「おおおお」

児玉「ごめんごめん」

前野「ちよつと。危ないっすよ」

児玉「そんなところ突っ立ってるほうが悪い。」

前野「エルメスが割れるとこでしたよお」

児玉「ん？ エルメス？」

前野「昨日引越した奴からもろたんです。…児玉さん、いります？」

児玉「ええのん？」

前野「僕からの、就職祝いです。」

児玉「（笑って）ありがとう。荷物になるね。」

前野「宅急便で送りましたよか。住所を…」

児玉「決まったらねえ」

美濃部、戻ってくる。

伸太郎「美濃部さん！」

美濃部「ん？」

伸太郎「いいですよ。書かせて。」

美濃部「何がや。」

伸太郎「いいですよ。美月にも書かせて。」

渡辺「いいんです、ホント。私。」

美濃部「なんば言いよるつか。当たり前やろうもん」

渡辺「でも卒業じゃないし。退寮だから」

美濃部「なんかそれ。出るときに書く。それでよかやないか」

児玉「だからミノリンはまだ書いてへんもんね」

美濃部「何年おつてもいい。出たいときに出ればよか。」

前野「重みがあるな。こんなでっかい筆でも買っときましょうか」

美濃部「前野くん。もうある。グハハ」

渡辺「でも、私2年しかいなかったし。ホントにいいんですか。」

美濃部「時間は関係なかばい。あなたはこの部屋で濃厚な麻雀漬けの2年を送った。書く資格が大いにあります。」

前野、マジックを渡す。

渡辺「なんて書いたもんかな」

渡辺、部屋を歩き、壁に書かれた字を無言で眺め読む。

皆、渡辺を気にはしているが、見ないで話を続ける。

伸太郎「さつき委員長の池上さんにあつたんですけど、やっぱり厳しいみたいですね」

児玉「そうなの？」

伸太郎「今週いっぱい立ち入り禁止にして、四月には取り壊すって話です。補修じゃきかないって」

美濃部「ここも古いけんのう」

前野「100年か。よく持ってますよ。あちこち穴だらけの落書きだらけ、ガラスは外れる、廊下は沈む、電球は切れる。」

間

児玉「あ、お湯」

お茶を淹れに立つ伸太郎と児玉。美濃部はあぐらか片膝立てで座っている。

渡辺、マジックのキャップを取る。

前野、渡辺のすぐ隣に立ち、

前野「なんて書くん？」

皆、信じられないという表情。

美濃部、前野をジッと見て、

美濃部「お前そういうところあるよな」

前野「え、興味ありますやん。みんななんて書くんやろうって」

美濃部「デリカシーつちゅう言葉があるぞ」

前野「ん、あい。知ってます」

美濃部「できとらんけどのお」

児玉「さあさあ、お茶が入ったでー。(渡辺に) こっちは気にせんでね」

渡辺「ありがとうございます」

渡辺、再び書く姿勢にもどる。

児玉、前野にティーパックを渡し、

児玉「自分でやりよし」

前野「えー！リプトン？エルメスにリプトン？」

渡辺、書き始めるので、

児玉「あ」

ちゃぶ台に座る。前野も気づき座る。

渡辺が書いた言葉は『2年だけど忘れない。美月』イラストつきである。コタツにもどる。お茶は淹れ終わっている。皆、姿勢を正している。渡辺、一口飲み、

渡辺「・・・甚だ僭越ながら、感謝の気持ちをしたためました」

なぜかそれぞれ軽くお辞儀をする。

渡辺、スツと席を立ち、ドア近くに置いてあった自分の手荷物の中から、丸ぼうろをもってくる。

渡辺「これまでのお礼です。…安いですが」

渡辺、立ったまま。

美濃部「こういうのは気持ちやから（受け取る）」

皆、お菓子をかじりお茶を飲む。

伸太郎「まあ近いですから。自転車で、15分くらいです。」

児玉「またおいで。・・・と言つても、ま、金曜までか」

お茶を飲む。皆、何かを言いたいわけでもないし、言いたくないわけでもない。かといつてお互いがお互いの気持ちをわかっているわけでもないということに今気づいたのかもしれない。

廊下の奥、寮の黒電話のベルが響く。4〜5回目で切れる。誰かが応対したようだ。

伸太郎「まあ、じゃそろそろ。」

児玉「忘れ物ないようにね」

伸太郎にうながされ、渡辺部屋を出ようとする。伸太郎、渡辺が持つ洗面器に気づく。

伸太郎「いらんもんは置いてった方がいいよ。荷物になるし」

渡辺、伸太郎の肉のない背中をつねる。

伸太郎「痛い痛い痛い。なんや」

渡辺「ん」（アゴで示す）

伸太郎、渡辺のケースをもって去る。

渡辺、振り返り、

渡辺「本当に、ありがとうございました！
と、深々と一札する。」

前野「ん」

児玉「ほなね」

美濃部「また会おう。元気で。」

渡辺「はい。じゃあ。」

渡辺、去る。

残った3人手持ち無沙汰で、麻雀牌を片付ける。

児玉は急須などを下手の机に片付ける。

美濃部「明るい、いい別ればい。」

児玉、美濃部を見て、何か言いたげにするが、何も言わない。

前野「なかなかええこと書きますねえ」

児玉「やめとき」

美濃部「伸太郎って打てないよな」

前野「ですね」

美濃部「覚える気もないやろなあ」

前野「ですね」

美濃部「・・・ワンカケやのう。(児玉に)明日は、あんたか。」

児玉「うん。」

美濃部「サンマもできんな。寂しくなるのお」

児玉「・・・」

前野「明日は、何時ごろ、出るんですか？」

児玉「夜かな。ぎりぎりまで、こっちにおるよ。」

前野「そうですね・・・」

と、館内放送が入る。

館内放送「村井です。109の。あの、電球見つかりました。・・・ええ、はい。もう、大丈夫です」

ブツリと放送終わる。

美濃部「・・・やったな(盗ったなの意)」

児玉「ね」

暗転。

窓から夕陽が差し込んでいる。今部屋には誰もいない。
廊下を走って来る足音が2つ。美濃部と伸太郎である。

美濃部の声「開けえ」

伸太郎、サッとドアを開ける。2人入って来る。

美濃部は両手で鍋を持っている。

鍋はある程度調理済みのもののように、クッキング手袋をつけている。
ちゃぶ台の上のIHにのせる。

美濃部「佳奈枝に見られてないよな」

伸太郎「大丈夫だと思えます」

美濃部「よっしゃ、よっしゃ。早よ準備しようや」

伸太郎、冷蔵庫を開けて、

伸太郎「あれ。美濃部さん肉は？買い忘れた？」

美濃部「違う違う。今日やる鍋はな…」

と言いかけたところで足音。廊下の窓に人影がうつる。

伸太郎と美濃部、ドアをおさえ、

伸太郎「児玉さんですか？ご飯もうちよつと待つといてください」

美濃部「もう少し時間かかるけん、ちよつと散歩でもしてこいや」

ドアの外から声がする。

前野の声「(女性っぽい声色で) あい。ほな湯にでもつかってきますう」

伸太郎、ドアをバツと開ける。前野が立っている。

前野「正解は前野くんでした」

伸太郎「お前か！」

美濃部「驚かせんな！佳奈枝かと思ったやろ！」

前野、キョトンとするが、鍋を発見し、

前野「あつ、鍋！今日鍋やるんですか？」

美濃部「佳奈枝へのサプライズパーティーや」

伸太郎「何鍋なんですか？」

美濃部「ふふふ。手に入れるのに苦労しましたよ」

美濃部、手招きし伸太郎を呼ぶ。耳打ちをする。

伸太郎「……ほんとすか。手に入るんですか？てかうまいんですか？」

美濃部「うまいか知らんけど、佳奈枝が食べたい言うってたけんさ。付き合ってくれや」

前野「え、なになに？教えてくださいよ」

美濃部「まあ楽しみにしとけや。てか佳奈枝がこっちこんように、前野見張つといてや」

前野「はいよ」

前野、廊下の外に出る。窓から前野の影が見える。

美濃部「伸太郎、すまん、今何時。」

伸太郎「4時前です」

美濃部「おう。ちょっと出てくるから、準備進めといて」

伸太郎「どこ行くんです？」

美濃部「業者からブツ引き取って来る時間なんや」

伸太郎「業者」

美濃部「なんといってもあれやからな。」

美濃部「中吉、すまんけど、酒買ってきてよ」

前野「俺すか？鉄壁の見張り中ですけど」

美濃部、一万円札を前野に渡す。

美濃部「これで買えるだけ買ってきて」

前野「おー、万札。ルービーっすか？」

美濃部「瓶ビールな、今日は。日本酒とかも欲しいよなあ」

伸太郎「ぜひ」

美濃部「頼んだで。絶対、佳奈枝にばれんとつてよ」

伸太郎「行ってらっしゃい」

美濃部去る。

前野「…で、何鍋なんや」

伸太郎「世の中には知らないほうがいいこともある」

前野「教えろや（と去る）」

伸太郎「中吉、ちょっと待って（と引き止める）」

前野「なんや。おしっこしたいのに」

伸太郎「（前野に）入れよ」

前野「なんやねん」

前野、部屋に入る。

2人、ちゃぶ台に座り、

伸太郎「お前、今日言うのか？」

前野「言うって何をお？」

伸太郎「児玉さんに」

前野「なにがあ？」

伸太郎「なんか、気持ちを」

前野「なんやねん、気持ちって」

伸太郎「今日で最後なんだし、言うなら言ったほうがいいと思うぞ」

前野「あかん。もれそうや」

前野、廊下走り去る。伸太郎も追いかけて廊下に出る。ドアのところまで、

伸太郎「言ったからな！しっかりやれよ！」

伸太郎、前野を見送る。

と、美濃部の部屋から児玉入ってくる。鍋の蓋を開ける。

伸太郎、廊下から部屋にもどってきて、気づく。

伸太郎「うわー！！！」

児玉「よっ」

伸太郎「どこから入ったんですか！？」

児玉「ずっとさな子の部屋いたわ。借りてた物まとめて返しにきたんよ。」

伸太郎「…なんか聞こえてました？僕らの話」

児玉、美濃部の部屋にもどり、

児玉の声「全然聞こえへんかったよ」

伸太郎「聞こえてたか…」

児玉もどつてきて、

伸太郎「(気づいて) あっ。前野のこと…」

児玉「ん、なにそれ？全部聞こえたわけやないからわからへん」

児玉、鍋を指さし、

児玉「蛇鍋やろ。やろうとしてるの？」

伸太郎「…さあ(と、とぼける)」

児玉「前あの子に話したんよ。蛇鍋が出てくる小説の話。食べてみたいなー、どんな味すんのか
なーってノリで言うたんやけど。用意してくれたか」

伸太郎「なんかうれしくなさそう」

児玉「最後の晚餐が蛇鍋ってうれしい？」

伸太郎「まあ、そうすね…。知らんかったことにしてくれませんか？」

児玉「大丈夫や。ちゃんと喜ぶから。うっそ、蛇鍋？手に入ったん？(蓋開けて) うっわー、え
っぐ！でもめっちゃ匂いええね！(スープ飲んで) うまつ！さな子、ありがとう！…っつて」

伸太郎「えらいなー」

児玉「まあでも準備してくれてうれしいわ。ありがとう(と頭を下げる)」

伸太郎「いえいえ。バレてしまつてすみません」

児玉「ええよ」

児玉、二段ベッドの下段に座つて。

児玉「美月ちゃん行っちゃったね」

伸太郎「ええ」

児玉「さみしい？さみしい？」

伸太郎「まだ1日ですよ。すぐそばにおるし」

児玉「心の中にね」

伸太郎「違いますよ」

児玉「伸ちゃんは初任地どこやっけ？」

伸太郎「神戸です」

児玉「仕事しながらだとなかなか会えへんくなるねえ」

伸太郎「まあ今まで近かったから、いいですよちよつと離れるのも」

児玉「そう」

伸太郎「児玉さんは東京か。美濃部さんと会えなくなりますね。遠いし」

児玉「そうねえ。まあ落ち着くまでは会わへんやろうね」

児玉、壁の落書きを見ている。

伸太郎「書くこと決めました？」

児玉「んー決まったような、決まってるような」

伸太郎「なかなか思いつかんもんですよね」

児玉「ねえ。今までめつちや時間あったのに。でも不思議やと思わへん？」

伸太郎「なにがです？」

児玉「なんでこんな始まったんかって。いつからやってるのかも知らんけど、私たちまで引き継がれてるわけやん」

伸太郎「そうですね」

児玉「最初の人は何書いたんかなあって思うのよ。すつごく残したい言葉があったんやろかって」

伸太郎「今となってはわかりませんね。どの部屋にも書いてあるし」

児玉「ねえ」

伸太郎「意外とくだんないことかも。『俺は酒を断つ』とか」

児玉『『二度と麻雀はしません』とかね。伸ちゃんは決めたん？書くこと』

伸太郎「んー、まだです」

児玉「ちゃんと書きいよ。伸ちゃんはなんか書かなそう」

伸太郎「そんなことないですよ」

児玉「書いて出てね」

伸太郎「見には来れないけど」

児玉「そうね。残念」

伸太郎、鍋が冷めてきてないかと蓋を開ける。IHを弱火でつける。

児玉「蛇鍋、食べたないなー」

伸太郎「まあ。おいしくはなさそうですよね」

児玉「あの子、最後までこんなことするんやね」

伸太郎「えっ…」

児玉「じゃ、あの子もどつて来る前においとましますかね。困るやろ伸ちゃんも」
伸太郎「すみません」

児玉、ドアの前で立ち止まり、

児玉「…なあ」

伸太郎「はい」

児玉「…私がこのまま、サヨナラ言わんとこの寮出たらさな子怒るかなあ？」

伸太郎「…それは怒るでしょ。というか悲しむ」

児玉「せやんな。そしてたぶんジツと耐えるんやと思うわ。「あ、行ったんか。そうか」って。
…伸ちゃんだけに言うとかわ。あんな、言うたら忘れてなあ」

伸太郎「…」

児玉「うち、さな子のこと嫌いかもしれん」

伸太郎「え(嫌悪)」

足音が聞こえる。廊下の窓に人影。

伸太郎「…誰か来る」

児玉、美濃部の部屋にもどる。

前野「おーい。開けてくれえ」

伸太郎「おう」

伸太郎、ドアを開ける。前野、両手にたくさんの酒が入ったビニール袋をさげている。

前野「いやあ重かった重かった。あれ、美濃部さんは？」

伸太郎「まだ」

前野「あーノド乾いた。水、水」

伸太郎「中吉すまん」

前野「あ？」

伸太郎「米もきれてたから買ってきて」

前野「嫌や！この酒、めっちゃ重かったんやで。お前が行け。俺は水を飲む」

伸太郎「…さっき児玉さんが来て、中吉のこと探してたぞ。」

前野「え」

伸太郎「スーパー一緒に行きたい、みたいなこと言ってたな。今行けば追いつく。外の方が話しやすいんじゃないかい」

前野「伸太郎。帰りは遅くなる」

前野、去る。児玉、美濃部の部屋から出てくる。

児玉「嘘がすいすいとよう出ること」

伸太郎「嫌いなんですか？ 美濃部さんのこと」

児玉「ごめんね、変なこと言ってる」

伸太郎「仲いいじゃないですか」

児玉「仲はいいんよ。けどねえ。…なんかよそよそしいねん」

伸太郎「…」

児玉「昔は違うかったと思うんやけど。5年前かなあ、寮の委員長したやろ。廃寮の話が出た年の。あの頃くらいからかな。あの子ちよつと変わったんよ。」

伸太郎「児玉さん、その話あんまり聞きたくないですわ。俺、何も言えんし」

児玉「ごめんね…でもあの頃から変に明るくなつたというか、無理してるっていうか、いろんなことあつたから、勘違いしちゃつたんかな。心開いてくれてない感じ。それがなーんか気になつてな。今日だつてずつと私のこと避けてるし。」

伸太郎「それは、蛇が…」

児玉「ほんまにそうかな。今日は、最後やし。いろんな話できるかなと思って、ずつと待ってたんやけどね。もう時間切れやね。」

伸太郎「(困って) なんで出ていく日にそんなこと言うんですか」

児玉「なんかね、伸ちゃんならわかるかなと思って」

伸太郎「・・・俺に言えつてことですか？」

児玉「ごめん。そうやない。言わんといて。さな子も、伸ちゃんも中吉くんも、たぶん笑つて出ていくべきなんやわ。これから色々あるわけやし。モラトリアムの最後にきつい思いする必要ないもんね。だから言わなくていいです」

伸太郎「児玉さんは、笑つて出られるんですか？」

児玉「…大丈夫よ、うちは。なんかせこくてごめんね」

廊下を歩く足音が聞こえる。

美濃部の声「伸太郎！」

伸太郎「美濃部さんだ。どうします？」

児玉「もう隠れられへん。うまく言うから安心し」

美濃部の声「伸太郎、おらんのか？包丁持ってきてくれ」

伸太郎、立ち上がり。

伸太郎「(美濃部に) 今行きます！」

伸太郎、包丁を持ち、児玉を気にしながら出ていく。

廊下では買ってきた蛇の解体が行われているのだ。

児玉、IHを切る。

マジックを持ち、壁に向かう。…が、書けない。

美濃部の声「よっしゃ、皮はげた。入れ物入れ物」

伸太郎の声「はっ」

伸太郎だけ入って来る。児玉と目が合う。黙って容器を持つ。伸太郎、出ていく。

児玉、ちゃぶ台のそばに座る。

容器を持った伸太郎と、美濃部が入ってくる。

美濃部「佳奈枝おる！」

廊下に引っ込み、

美濃部「入れるなって言ったろうもん」

伸太郎「いや違うんですよ、児玉さんがあ」

美濃部「ばれたんか？」

伸太郎「バレてないっす。バレてないっす」

二人、入ってくる。

児玉「無理やり乗り込んだじゃった。何、お鍋やるん？」

美濃部「(伸太郎を見て) お。えーこれそしてお鍋。ふふふ」

児玉「なに企んでんのお」

美濃部「伸太郎、見せたりい。腰抜かすばい」

伸太郎、蛇の入った容器を持って児玉に近づく。蛇の頭を見せる。

児玉「オエッ、何これ！ねえ、何これ！」

美濃部 「ガハハ！蛇や蛇！すごろう」

児玉 「蛇？え、蛇食べんの？」

美濃部 「蛇鍋や。自分が食べたい言うてたやん」

児玉 「嘘やん。言ったっけ？」

美濃部 「小説に書いてあったって言うとったやろ。最後にサプライズ！ジャジャーン」

児玉 「食べられるん、これ？」

美濃部 「滋養強壮にいいらしいわ」

児玉 「最後の食事が蛇鍋かー」

美濃部 「ジャジャーン！ええやん、思い出に」

児玉 「絶対記憶に残るわ」

前野 帰ってくる。米袋を抱えている。

前野 「ただいまあ。あれ、児玉さん！（伸太郎に）もうサプライズ終わった感じ？」

美濃部 「間が悪かねえ、今サプライズ中ばい」

前野、米袋をバサツと床に置く。美濃部、前掛けをはずし自分の部屋に投げ入れる。

伸太郎 「（前野に）お前、5キロって。もう出るのに、こんなにいらんだろ。考えろよ」

前野 「たくさんあった方がめでたいやろうが。送別会で佐藤のご飯チンできるか。（児玉に）児玉さん、なんか僕のこと探されてました？」

伸太郎 「あ、それ（と戸惑う）」

児玉 「そうそう。探してた」

前野 「なんか用ありました？」

児玉 「ちよつとお茶でもと思っただけ、ごめんね。」

美濃部 「ああ残念やったなあ、中吉。」

前野 「（無視して）行きましょか、今から。お茶」

児玉 「もうご飯あるもん。これ」

前野 「（聞こえてない）じゃあ食べた後行きましょね。新幹線、8時すぎでしたよね」

児玉 「それなんやけど・・・（美濃部に向き直り）時間早まってん」

美濃部 「…そうか。何時？」

児玉 「17時半」

伸太郎 「え、あんまり時間ないですね。」

美濃部 「あと、1時間くらいか」

伸太郎 「急いで準備します。」

前野 「駅まで送りますわ。うまいコーヒー飲ますとこ知ってますから」

児玉「ええよ、悪いし。それにうちコーヒー飲んだら電車で酔うてまうねん」
伸太郎「ま、ま。はやく作りましょ」

伸太郎、急いで蛇肉を鍋に投入し、IHで温め始める。

前野「蛇鍋か。懐かしいな」

美濃部「お前食べたことあるんか」

前野「ありますよ」

伸太郎「いつ？」

前野「昔。じいさんがよく作ってた。死ぬ直前までギリギリしてたわ」

伸太郎「うまいの？」

前野「腕次第ですな。味付けは？」

美濃部「醤油でやろうと思とる」

前野「素人ですねえ。味噌と酒で臭みをとらんと」

美濃部「味噌と酒か。料理酒あつかな。酒、酒」

と部屋を探し始める美濃部と伸太郎。

前野は鍋の火加減を見る。

児玉「ごめんね。急に決まったんよ」

美濃部「全然。あつちで何かあんの？」

児玉「会社の同期になる人たちと飲み会が入ったんよ。人事部の人たちも来るみたいで、顔くら
い出さんといかんくて」

美濃部「そうか。そら、行ったほうがいいわ」

児玉「まあでも遅れていけばいいから」

美濃部「最初やし遅刻せんほうがよか。支度は済んだん？」

児玉「そっちはもう」

伸太郎、料理酒が見つからず、前野が買ってきた日本酒を入れる。

前野「バカ、お前それいい酒やんけ。あんま入れんなや！」

伸太郎「ケチなこと言うなよ。小っちゃいなあ」

美濃部「そやそや。ドーンとやっつたれや」

伸太郎「ほれほれ（と注ぐ）」

前野「そんなくらいでオツケー、オツケー」

伸太郎「お次は味噌、味噌」

と冷蔵庫から味噌を探すが、味噌はきれいている。

伸太郎「うわ、味噌もきれてる。ごめん中吉買ってきて」

前野「また俺か！自分で行けや！」

伸太郎「小っちゃいなあ」

美濃部「ガツカリやなあ」

前野「蛇鍋やるなら味噌くらい買っとけよ。これやから素人は」

児玉、3人の楽し気な雰囲気居心地の悪さを感じ、

児玉「明るく）うち、行ってくるわ。うちの会やし」

前野「いやいや。そんなわけいかんでしょ。主賓ですから」

児玉「手伝わせてよ」

美濃部「よかて。今日くらいドツカリ座るとき」

児玉「なんか落ち着かんなあ」

前野「うまい蛇鍋、食わせますから。ちょっと味噌探してくるわ。」

と、前野外へ行こうとするが、伸太郎、呼び止める。

伸太郎「中吉。お前は火加減見て。美濃部さん。味噌探しにきましょ。」

美濃部「鍋奉行、他に必要なものはございますか？」

前野「ネギが欲しい…」

美濃部「あい、わかった。」

前野に緊張が走る。美濃部と伸太郎出ていく。前野、鍋の灰汁をとったりする。

前野「ほんとは、ちよつと焼いてからのが、風味がいいんですけどねえ。」

児玉「ごめんねえ、準備してろうて」

前野「いえいえ。最後くらい」

間。

児玉「お茶、ごめんねえ」

前野「いや、嫌いなら。全然大丈夫です」

児玉「バタついてしもうて」

前野「ええ」

短い間。

前野、思い出したように壁を見て、

前野「まだ書いてないんですね」

児玉「うん。まだ」

前野「…児玉さんいいこと書きそう。かっこいい言葉とか」

児玉「そんなことないよ」

前野「博士やし。文学専攻やし」

児玉「中吉くんは数式書くん？」

前野「それもかっこいいですねえ」

前野、しばらく文字を眺めていたが、少し姿勢正して、

前野「児玉さん…あの…なんていうか」

児玉「…はい」

前野「…」

児玉「…どうしたん？」

前野「(やはり言えず)…いや。……こう、小中高と卒業があつたわけやないですか。今大学ですけど。卒業が近づくと、こうみんなやり残したことないかな？みたいに言うでしょ。今やらんと後悔する。みたいな」

児玉「(うなずき) うん」

前野「でも。期限ギリギリになったからって、これまでやらなかったことやったり、言えへんかったこと言ったりしたって、なんか…苦しいですよ。それまで出来ひんかったことなんやから、それは出来ひんかったことなんですよ。勢いで、はずみで、出来たことにする位なら、出来ひんかったって後悔するほうが、なんか、真つ当とちやいます？…「後悔のない人生なんて」って思いません？きつとつまんないですよ、後悔くらいないと」

と、児玉の目ををじつと見る。

児玉「…(笑顔になって) そやね。そうかもね。」

前野「(よかったと笑顔になり) ね。うん。我ながらええこと言うた。あげますわ、この言葉」

児玉「ありがとう。…でもね、中吉くん。私は、できれば、言うべきやと思つたことは、言っておきたいの。たとえ、最期の雰囲気の後押しであっても。」

前野「それも…そうやと思います。」

廊下側の窓に人の影がうつる。伸太郎、遠慮がちに部屋に入ってくる。

前野、伸太郎に近寄り、

前野「あったか？」

伸太郎「あった。村井が持ってたわ。味噌とネギ。味噌汁作ってた」

前野「よし、味噌投下！ 伸太郎、皿とコップ並べといて。ネギも行こう。」

前野、きびきびと作業する。

伸太郎、皿とコップ並べ始める。

美濃部、入って来る。

美濃部「めっちゃいい匂いやん。さすが味噌。」

前野「でしょ！」

美濃部「こんななんもあつたでー」

美濃部、カイワレを持っている。

前野「どこにあつたんですか！？」

美濃部「廊下で育ててたわ。誰かの忘れ物や。いっぱいあつたし、少しくらいよかろう」

前野「投入！」

それぞれ席につく。伸太郎、酒をつぐ。

美濃部「カナエはこれから会社の人と会うから、少しでな」

伸太郎「はい」

児玉「いいよ、一杯くらゐ」

美濃部「酒くさくて行ったら印象よくないから。辛抱辛抱」

前野「(味見し)もう、行けますよ」

酒をつぎ終えて、

伸太郎「じゃあ美濃部さんから」

美濃部「ええ。児玉佳奈枝さん。あなたは常に明るく、寮生にとって頼れるお姉さんでした。東京に行ってもその明るさを大切に、体も大切に頑張ってください。活躍をお祈りしています。またこうして集まれる日が来ることを願って。乾杯」

3人「乾杯」

食べ始める4人。

美濃部「かたっ！」

児玉「かたい！」

前野「肉を食べるといふか、野性味を楽しみんですよ」

伸太郎「名前ほど味にインパクトないあ」

児玉「骨の多い鶏肉みたいなあ……」

黙々と食べる4人。

美濃部「初めて鍋やったのっていつやつけ？」

伸太郎「最初か、いつだったけな」

美濃部「なんか、伸太郎が風邪ひいたかなんかで、体温まるもんつくろうやってなったんやなかつたかな。なあ？（と児玉に）」

児玉「あーあったねえ」

美濃部「そやそや。年末やったわ。みんな帰省してて人少なくて。なんか集まったんやわ」

伸太郎「水炊き作ってくれましたよね、鶏肉で。うまかつたな」

美濃部のコップが空のことに気づき、

伸太郎「美濃部さんビール？」

美濃部「あ、すまん」

伸太郎「児玉さんは？」

児玉「ちよつとちようだい」

美濃部「ちよつとにしときいよ」

黙々と食べる。

美濃部（児玉に）「うちの代に坂田くんっておったやろ」

児玉「誰？」

美濃部「坂田くん。眼鏡かけたガリガリの」

児玉「ああ」

美濃部「あの人、うちの代でミスコン出とったきれいな子おるやん？あの子と結婚するんややろ」

伸太郎「へー！」

前野「眼鏡でガリガリなのに」

美濃部「寮入ったときめっちゃ太ったんやけど、その結婚する子とゼミで一緒になって、告白したんよ。そしたらフラれてさ、彼自分の部屋から出てこんくなったんよ。みんなめっちゃ心配してさ、そしたら夜にうちの部屋きて、この手紙渡してほしいって。あんたちゃんとご飯食べて元気出しやって言ったんやけど、「美濃部、どんなデブもデブのまま餓死せんとぞ。餓死するときはしぼんで死ぬんぞ。俺はまだ死ぬん」とお腹たたいて出ていったわ。そのドアから（と指さす）」

前野「かっこいいのか悪いのかわからん」

伸太郎「かっこ悪いやろ」

美濃部「うち心配なってるさ、手紙見たんよ。そしたら、「君と付き合いえないなら、生きていても仕方ない。かといって死ぬのもこわい。だからひとつの賭けをします。僕は今日からハンガーストライキに入ります。あなたが来てくれるまで私は何も口にしません。来てくれなかったら私は緩やかにしぼんでいきます」（児玉に）覚えてる？」

児玉「うん」

前野「ほんでほんで」

美濃部「私すぐに手紙渡しに行ったよ。でもね、来ないのよ、これが、なかなか。2週間経って、なんか部屋から変な匂いしてないか？救急車呼べ！ドア壊すぞ！ってなったとき、ついに来たんだよ。その子が」

前野「おお」

美濃部「ドアの前で「私です」って声かけても、部屋はシーン。返事がないのね。それでみんなドア壊して、入ったら、小さくしぼんだ彼が、ボウボウの髭の中で泣いていたのね。急いで救急車呼んで、病院行きよ。それで見事付き合ってたね。退院して寮にもどってきた日に、みんなビールかけたわ。楽しかったなあ。なあ」

児玉「うん」

伸太郎「ええ話ですなあ」

前野「ほんまやなあ」

美濃部「君らも見習わんといかんよ」

児玉「ちよっとお手洗い行ってくるわ」

児玉、去る。

伸太郎「…あんまりしゃべりませんね」

前野「…最後やしな。色々おさえてるんやろ」

美濃部「……」

伸太郎「…中吉」

前野 「ん？」

伸太郎 「いや、いいわ」

前野 「…言うたよ」

美濃部 「本当か？」

前野 「ええ。…言わないということ言いましたん」

伸太郎 「なんやそれ」

前野 「ぬるいきみにはわかるまい」

美濃部 「お前がよかなら、それでよか」

前野 「(うなずく)」

少し経って、児玉もどってくる。

伸太郎 「(児玉に) 東京では寮ですか？」

児玉 「会社が借りてくれたアパート」

伸太郎 「そうですか」

児玉 「美月ちゃんに遊びに来てって言っついてよ」

伸太郎 「ええ」

前野 「東京大変でしょうね。満員電車なんですよ。全部。朝から夜まで」

児玉 「うん。まあでも慣れるよ、そのうち」

美濃部 「最初は仕事もきついやろうけど、辛抱してやらんとね。3年間は勉強やと思って」

児玉 「うん」

児玉、かすかに微笑むだけである。

伸太郎 「児玉さん、つぎましょうか」

と鍋をすすめる。

児玉 「(首を横にふる) …ええわ。もう十分。ご馳走様でした」

前野 「もうちよつと食べたらいですやん。あんまり食われへんですよ、これ」

児玉 「もうええって。…こんな感じなんかね、8年住んだ終わりが」

3人、児玉を見る。

美濃部 「後輩の前やぞ」

児玉 「もっと大事な話をしたいなと思うねん。今しかできひん話というか」

前野「大事なつて」

児玉「わからんけど。少なくともガリガリの話とかではない」

前野「児玉さんとの思い出みたいな」

児玉「私のことなんてどうでもいいんよ」

前野「(困惑の笑みを浮かべる)」

児玉「なんで笑うのかわからへん」

前野「すいません…」

児玉「ええねんけど(と軽い困り笑い)うちも笑てるし…」

児玉、少しうつむく。考えこんでいる。

美濃部は真顔で児玉を見ている。

伸太郎「してくれたら聞きますよ」

伸太郎、児玉をジッと見る。

伸太郎「児玉さんがしたい話あるんだつたら、僕ら聞きますよ」

児玉「そういうことでもなくて。…うまく言われへんけど、あ、なんかテンパってるわ。ちよつと待って」

少しの間。考えている。

児玉「…私が今日出ていく。中吉君が明日、明後日が伸ちゃん。…そのときになんかヘラヘラと思ひ出語つて出ていくんでいいのか、つて。(2人を見て)…いいのか、君らは。」

伸太郎はジッと児玉を見ているが、前野はうつむいている。

児玉、背中で呼吸をする。

児玉「楽しかったんけど、それだけじゃなかったし。こういうときしか、今しか、話せへんことやってあるんやから。そやから、壁に書くことだつてやろうとしてるわけやし、」

美濃部「出ていくときだけポイこと言うのやめろや」

児玉「あんたに言われたない！」

児玉、立ち上がり、

児玉「(再び)あんたに言われたない！」

児玉「静かに）…この寮がつぶれることが残念で仕方なかったけど、せいせいするって今思ってます。もどる場所がなくなるわけやから。スッキリします。」

伸太郎、突然自分の体を叩き始める。そして呪文のように、

伸太郎「最悪の別れ方やなあ。最悪の別れ方やなあ。最悪の別れ方やなあ。」

と唱え始め、部屋を奇妙なリズムで歩き始める。

前野「伸太郎、やめや。なあ、やめやあ」

伸太郎「スカッと楽しく別れたいなあ、スカッと楽しく別れたいなあ…」

美濃部、ビール瓶を持ち伸太郎のコップにビールを注ぐ。

美濃部「伸太郎、落ち着け。これ飲め」

伸太郎、ビール瓶の方に目がいく。コップではなく、ビール瓶を受け取り、

伸太郎「…児玉さん。ビールかけしましょうや」

児玉「え？」

伸太郎「最悪の思い出ならもつと悪くなってもいいでしょ。付き合ってくださいや」

伸太郎、服を脱ぐ。

伸太郎「部屋でやるとまずいんで。外行きますよ。中吉、行くぞ！」

前野「えっ？」

伸太郎「いいから来い！」

前野「お、おう」

伸太郎と前野、ビール瓶をかき集めて廊下へと去る。

部屋に残された2人。

美濃部「…なんで最後の日にそんなふうになんのよ」

児玉「……」

美濃部「今日のアんたはさっぱりわからん。後輩に気遣わせて。しっかりしなさい」

児玉「・・・」

美濃部「私に何か言いたいことがあるんか」

児玉「そうかも。でも言ったら傷つけるかもしれない」

美濃部「そんなん言うてみなわからん」

児玉「(迷う)」

美濃部「言ってみてよ。あんたからの餞別としてありがたく聞くよ。：でもな、それが当たってたとしても、私はもうあんまり傷つくこともないと思う。残念なことだけど」

児玉「そう・・・」

美濃部「ちよつと長くいすぎたのかもしれないね」

児玉「さな子。私はもう行くんよ」

美濃部「あんたみたいな友だちができたのが私の誇りや」

外から声。

前野の声「(絶叫気味に) 早よしてくださいあああい！」

伸太郎の声「まだですかあああああ！」

美濃部、窓に近づき、

美濃部「今行くわあ！」

二人の声「はあああい！」

美濃部、窓を閉める。

美濃部「(児玉に) ほら。楽しそうにしてくれてる。あんたも楽しんで見せなさいよ。最後なんだから。駅まで送るね。」

美濃部、ビール瓶を持ち、去る。

児玉、大きなため息。マジックを持ち、壁の方に行く。そして書く。

『復活の前に死がある』

窓の外からは楽し気な声が聞こえる。

前野の声「寒みー寒みー」

美濃部「まだまだあるわー」

伸太郎の声「ぎゃああああ」

美濃部の声「中吉、全部脱げえ」

前野の声「ダメダメダメ!!!」

兎玉、書き終える。ドアを閉める。と同時に暗転。

コタツの上に鍋が残ったまま。畳の上には空き瓶が転がっている。
館内放送が入る。やや興奮気味の声で、

館内放送の声「執行部の飯塚です。15時からの全体集会ですが、大学側との交渉が長引いているため、開始時間変更でお願いいたします。また時間が見えましたら改めてご連絡差し上げます。全体集会の開始時間変更です。時間は決まり次第ご連絡いたします」

ピンポンパンポンと館内放送が終わる。

2段ベッドの上段から足がぬつとあらわれる。前野の足である。

自室から美濃部が出て来る。起きたばかりで目があいていない。髪にも寝癖がついている。腰に手をあて部屋を見回す。カーテンを開ける。早春の光が部屋にさしこむ。目をこする。

美濃部、ちゃぶ台の上の鍋や食器を抱え廊下へと消える。洗い場に行ったのである。

前野、寝返りをうつ。

ドアがノックされる。1人の寮生(村井)がやって来たのだ。きちんとした身なりの男である。彼はこれから寮を出ていく。その挨拶をしに来たのである。

村井「伸太郎。いるか。109の村井や」

部屋に入る。ベッドの上に誰かいるのを見つけ、はしごに足をかけ、体を揺さぶる。

村井「伸太郎。俺もう行くからな。世話になったな」

前野、手をあげバイバイと手を振る。

村井「お前、神戸いくんやってな。俺は初任地和歌山やから、落ち着いたらまた会おう」

前野、親指を立てグーのポーズ。

前野「消え入るような声で」伝えとくよ」

村井、布団をはがして、

村井「なんや、お前か」

前野、体を起こす。ひどい寝癖である。二日酔いで頭痛がしている。

前野「今、何時？」

村井「3時前や」

前野「行くのんか？」

村井「ああ。伝えといてや」

前野「おう。何を。」

村井「お前、神戸いくんやってな。俺は初任地和歌山やから、落ち着いたらまた会おう」

前野「うん。がんばる。…別れる前にな、水をくれない？」

村井「お前も早よ支度しろや。東棟は今日で全員おらんかったそうや。こっちも、一階は俺で最後や」

村井、冷蔵庫を開ける。水を取り出し、なにかしらコップを見つけて注ぐ。

前野その間、あぐらをかいて寝ている。布団を体に巻きつけているので雪だるまのようである。

村井「だらだら残つとるんは、お前らだけやで」

とやや大きい声で言うので、

前野「(弱って) ……うるさい。二日酔い」

村井「(水を渡し) 早よ飲めー」

前野、水をングングと飲む。やっと少し目を開け、

前野「村井か…」

村井「今さら。今日引越しやろ、お前。」

前野「うん」

村井「荷造りできたんか。あ？」

前野「できていない」

村井「(あきれて) お前。引越し屋、何時や？」

前野「頼んでへん。何が引越しじゃ。荷物全部捨てたんねん」

村井「…。お前、どうするんや」

前野「え」

村井「これから。お前就活途中でやめとったやろ」

前野 「お前に関係あれへん」

村井 「関係ある。」

前野 「…もう一回寝る」

村井 「行くところあるんか？」

前野 「…実家。帰るわ」

村井 「実家。どこや」

前野 「新潟。」

村井 「遠いな。和歌山からは遠いで」

前野 「わざわざ会いとうない」

村井 「せやな。ま、慎ちゃんも荷造りあるんやから、あんま邪魔すんなよ」

前野、ベッドの上で正座になり、頭を下げる。

前野 「お世話になりました。さよなら。…早よ行ってください」

村井 「昨日勘定したら未払いあったわ。麻雀の。二万円。」

前野 「その節は本当に。早よ行ってください。せいぜいお元気で」

村井 「まーええわ、二万くらい。これからは月給とりやさかいな。」

村井、部屋をぐるりと見まわす。壁に近寄り、書いてあることを読む。

村井 「これ。児玉さんか。え？ さすが、ええこと書かはる。お前、好きやったろ？」

前野 「早よ行けや！」

前野、枕を村井に投げつける。が、急に動いたことで頭がガンガンと痛む。

村井 「相合傘書いたらろ」

前野 「村井！（と、また頭が痛むので）村井君、やめなさい」

前野、ゆっくりとはしごを降りる。ゆっくりと降りるがずり落ちる。その牛歩にあわせて、村井もマジックのふたを開け壁に書こうとするフリをする。前野、ゆっくりと村井のところまではっていき、止める。

村井 「はい、セーフ。冗談や。ここに悪ふざけ書く気にはなれん」

村井、壁を見回し、

村井「何度も見てたはずなのに。…今日は沁みるのお」

前野「気取り屋が」

村井「俺の部屋のも、見てええで。感動するで。」

前野「おー、白ペンキで塗っといたるわ」

村井、前野を足で踏んづけ、去ろうとする。

村井「元気でな。もう二度と会わんやろうけど」

と、そこに伸太郎が組み立てる前の段ボールを数枚重ねて部屋に入って来る。

伸太郎「おう」

村井「よう！伸太郎」

伸太郎「行くんか」

村井「おう。世話になったな。お前神戸いくんやってな」

伸太郎「そうや」

村井「俺は初任地和歌山やから、落ち着いたらまた会おう」

伸太郎「おう。会おう。連絡するわ」

2人、握手をする。

村井「…じゃあな」

と名残惜しそう。

村井「(前野に)じゃあな！」

と大声で言い、村井去っていく。

前野、耳をふさぎ、頭痛に耐える。

伸太郎、勉強机の上のラジオをひねる。ラジオ流れ出す。灰皿を勉強机の上に置き、タバコに火をつける。

伸太郎、床に落ちた布団をベッド上段にあげる。

伸太郎、段ボールを数枚、前野の横に置き、

伸太郎「これ、お前の分。鍋、片付けてくれたんか。ありがとう」

伸太郎、冷蔵庫から水を取り出し、2つのコップに注ぐ。

1つは自分で飲み、1つはコタツの上に置く。

前野、一気に飲む。伸太郎も軽い二日酔いのようなだ。

伸太郎、段ボールをひとつ組み立てる。勉強机に腰かけ、机の上の教科書などを乱暴に箱の中に放る。この箱はいらぬものいれなのである。作業をしながら、

伸太郎「シャワー浴びてこいよ？」

作業を続ける。

伸太郎「おい、シャワー浴びてこいって。今日出るんやろ」

前野「どいつもこいつも。そんなに今日出ていかせたいんか。なんや、引越す気がなくなったなあ。」

伸太郎「そうか。なら俺の荷造り手伝ってくれ。今日中にはまとめたんや。」

前野「シャワー浴びてくるわ」

前野、仕方なくという感じで起き上がると、

ドアがノックされる。

渡辺「お邪魔ー」

と、渡辺が入って来る。伸太郎、タバコを急いでもみ消す。

前野「おう」

渡辺「うわっナニコレ」

前野「おー。送別会をやったのです。兎玉さんの」

渡辺「(前野を見て) ひどい顔。大丈夫すか？」

前野「ビールかけをやったのです。酔いますな、あれは。おえ(ともしそうになる)」

渡辺「大丈夫すか？ 吐くなら外で。」

前野「おえ。なんか袋ない？」

渡辺「トイレ、トイレ」

前野「ををを(と出そうになるが、ゴクリ) ひっこんだあ」

渡辺「きたなあ」

前野「何しに来たん？」

渡辺「来ちゃダメ？」

前野「んーダメー(と気持ち悪く言う)」

渡辺「荷造りの手伝いです、この人の」
前野「優しいねえ」

渡辺「彼女なんで、一応」

前野、またベッドにもどる。

渡辺、振り返り伸太郎を見る。

渡辺「効果音をつけて」ニヤリ」

伸太郎「せかせか（とこちらも効果音で応酬する）」

渡辺「くんくん」

伸太郎「もみけしもみけし」

渡辺「はーん」

伸太郎「ふー、くわばらくわばら」

渡辺、伸太郎に近寄り頭を思い切りはたく。

渡辺「冷たく」バレバレ」

伸太郎、必要以上に痛がり続ける。

渡辺「痛がりすぎだから」

伸太郎「二日酔いー！ また気持ち悪くなってきた。おえ。（と水を飲む）」

渡辺「はいはい、ごめんごめん」

渡辺、伸太郎の背中をさすりながら、

壁に兒玉が書き残した言葉を見つめる。無言で読み、

渡辺「兒玉さん、行っちゃったんだね。・・・ビールかけやりたかったなあ。やったことないし。

（伸太郎に）ほんとそういうところ気きかないよね」

伸太郎「くわばらくわばら」

渡辺「部屋も全然片付いてない。間に合うのこれ。やんなきゃならないことはさっさとやんなよ」

伸太郎「チューしてくれたらやる」

渡辺「チューだけでいいんだっけ」

伸太郎「どうしようかなあ」

前野、起き上がり、

前野「おいおい！俺いるから！」

渡辺「(前野に) ウソウソ。(近づき) 兒玉さん、喜んでました？(と笑顔で)」

前野、コクンとうなずく。

渡辺「それはよかった」

前野、コクンとうなずく。

間。

伸太郎「シャワー、浴びてこいよ」

前野「…そうする」

前野、立ち上がり廊下に行く。廊下に出る瞬間、渡辺をチラリと見た。悲しい犬のよ
うな眼。

2人になったので、

渡辺「言わなかったんだ」

伸太郎「うん。…昨日は兒玉さんが主役だったから」

渡辺「まあそうか…」

伸太郎、椅子からおり、ごろんと床に寝転ぶ。

伸太郎「頭が痛くて死にそうやー」

渡辺、伸太郎をまたいで立ち、首を絞めるように両手を突き出し、

渡辺「殺してあげよっか？」

伸太郎、渡辺の真下に顔が来るように体を移動させる。渡辺はスカートである。

伸太郎「あー死んでもいいなー」

渡辺「最高でしょ」

伸太郎「夢のようですよ。…いつも見る夢。最近こればっかやなー」

渡辺「殺すよ？」

美濃部、ふきんとお盆を持って入ってくる。残った食器を片付けに来たのだ。伸太郎と渡辺、一瞬かたまる。

美濃部「おう。おかえり」

渡辺「ただいま」

美濃部「どうや、一人暮らしは」

渡辺「うん、壁がきれいです」

美濃部「それはいい部屋や。ハハ・・・廊下のほう片づけてくる」

伸太郎「すみません」

渡辺「すみません・・・」

美濃部「あ、中吉は？」

伸太郎「シャワーに」

渡辺「シャワーに・・・」

美濃部「あ、そう。あとでちよつと話しあるから。・・・じゃ、続けて」

美濃部、去る

渡辺「片付けよっか」

伸太郎「ん」

片付けを開始する。伸太郎は本棚の本や机の上を片付ける。渡辺は田コンロや酒瓶などを片付ける。

伸太郎「自分のあったら持って行って」

渡辺「こないだ見たしもうないよ、たぶん」

部屋を歩き、雑誌をひろい、

渡辺「これは？」

伸太郎「(見て)いらん。からこっち」

伸太郎が指さした箱に放る。

渡辺、部屋の隅に古い電球を見つけ、

渡辺「これ、まだある。捨て方がわかんないのね。」

伸太郎「いいよ、捨てる」

伸太郎、受け取ろうとするが、渡辺、電球を渡さず、

渡辺「昨日、なんかあった？」

伸太郎「？」

渡辺「なんか、空気がざらっとしてる。」

伸太郎「・・・別れ際やしなあ」

渡辺「ふうん」

伸太郎「片付け俺するし、コーヒー淹れてくれん？」

渡辺「めんど」

伸太郎「いいじゃん、たまには。二日酔いときの対応でいい女かどうかわかるらしいよ」

渡辺「よだれ入れてやる」

伸太郎「たっぷりめで」

渡辺「きも」

渡辺、電球をちゃぶ台に置き、廊下に出ていく。

いらぬもの箱がある程度いっぱいになったので、伸太郎箱をガムテープで閉じ、部屋の隅に寄せる。

すぐに次の箱を作り、またモノを詰めていく。

遠くで電話のベルの音がする。すぐに誰か出る。

渡辺、コーヒーを淹れたコップを2つ持ってもどってくる。勉強机の方まで来て、机に1つ置く、

渡辺はちゃぶ台でコーヒーを飲み始める。

伸太郎「夜なんかあんの？」

渡辺「バイト。(コーヒーを指さし)ありがとうは？」

伸太郎「ありがとう」

短い間

渡辺「なんか、私いらなかったっぽいね」

伸太郎「そんなことないよ」

2人、コーヒーをそれなりに少なくなるまで飲む。

渡辺 「なんて書くかな、中吉さん」

伸太郎 「よめないね、あいつは」

渡辺 「兒玉さんへの愛の告白だったりして」

伸太郎、あんまり前野のことを冗談にされたくないのので特に返答しない。

渡辺 「気づいて」 冗談じゃん」

シャワーを浴びた前野が廊下に見える。後ろから美濃部が来て、

美濃部の声 「中吉、今ええか？」

前野の声 「はい」

美濃部の声 「うちの部屋で」

と2人入って来る。

美濃部 「うっす」

伸太郎 「うっす」

前野 「(渡辺に) あ、まだおった」

渡辺 「シャワー早くない？ちゃんと洗いました？」

前野 「厳選して洗うタイプやから(と、ちゃぶ台に座り、渡辺と伸太郎に) アカンこととしてへんかったらうなあ」

渡辺 「しーらない」

美濃部 「中吉。うちの部屋で」

前野 「…」

美濃部と前野、美濃部の部屋の方に行く。美濃部だけ顔を出し、

美濃部 「すまん。ちょっと外してくれるか。」

伸太郎 「はい」

美濃部 「悪いな」

美濃部、部屋へ引っ込む。伸太郎、詰め終わった段ボールを持ち、

伸太郎 「ちょっと俺ら飯食ってきますわ」

美濃部の声「すまんすまん」

前野「(顔を出し) 別におればいいやん」

伸太郎と渡辺、廊下に消える。以降、窓の外で伸太郎と渡辺の影絵。相談しているようだが、最終的に伸太郎だけ廊下に残る。伸太郎は部屋の中の声を聴いているようだ。

美濃部の声「中吉、昨日はすまんかったな」

前野の声「全然です。めっちゃ酔いましたけど」

美濃部の声「いや、その、なんだよ。こう、うちばかり佳奈枝と話してしまっ」

前野の声「なんすか、それ(と軽い感じでないすが、ややいら立ちが入っている)」

美濃部の声「最後は佳奈枝もあんな感じになったし、うちがもうちょっとちゃんと段取りしとつたら、中吉にも駅まで見送りにきてもらえたりしたと思うんや」

前野の子「別にええですよ。済んだことですから」

美濃部の声「「言えへんことを言った」って昨日言っつたばってん、どういふことなんや？」

前野の声「ええですって、もう。入ってこんといってくださいよ」

美濃部の声「好きやってんやろ？」

前野の声「知らんすよ。なんか別にそういうのじゃないんで。え、なに。うわーやだわー、この感じ」

美濃部の声「中吉。怒ってもいいから最後まで聞いてくれ」

前野の声「怒るとかやなくて、ほっといてほしいんですよ、僕は。どいつもこいつも。てか美濃部さんこういう話したくない。大学生みたいやん、結局」

美濃部の声「ここを出ていく奴にうちは餞別渡してるやろ。お前に何渡すべきか考えてたんや」
前野の声「いらんわー！」

美濃部の声「中吉！」

と、前野飛び出しってくる。

館内放送が入る。

館内放送の声「委員長の池上です。大学当局との交渉が終了しました。その報告および執行部交代の集会を行いますので、全寮生は食堂にお集まりください。えー、大変残念です。残念ですが、最後の集会となると思います。皆さん、ぜひ、お集まりください。」

美濃部、出てくる。

美濃部「……殴ってもいいから聞け。うちは佳奈枝に聞いた。中吉があんたを思ってることは知ってるやろって。どう思ってるんやって」

前野 「小さく吐き捨てるように」勝手に」

美濃部 「昨日な、駅で別れるとき、渡してほしいって手紙受け取ったんよ」

前野 「……」

美濃部 「これ。……ババアが勝手にやったことや。中は見てない。読むか読まんかは任せる。餞別や。新潟帰っても元気でやってくれ。な」

美濃部、廊下へ。

伸太郎 「あつ、あの。集会、始まるみたいです。」

美濃部 「……行こうか」

美濃部と伸太郎、去る。

が、伸太郎だけでもどつてくる。

伸太郎 「……顔、ボロボロやな」

前野 「ほつとけ、二日酔いや」

伸太郎 「……大丈夫か？」

前野 「大丈夫やない。児玉さんも美濃部さんも最近ずつとおかしくなってるわ」

伸太郎 「あんな児玉さん初めて見た」

前野 「うろたえすぎや、卒業するくらいで」

伸太郎 「そやな。(手紙に目が行き) それ」

前野 「いらん世話焼かれたわ。あの人(美濃部)ほんま。「渡された」言うてたけど、「書いてくれ」って頼んだに決まっとるわ、絶対。最後やからってしようもない」

伸太郎 「……」

前野 「伸太郎。お前、美濃部さんに一発食らわせや。垢落として出ていかせな。外には俺らみたいなええ奴ばっかりちゃうからな」

伸太郎 「……。 (手紙指さし) そっちは自分でケリつけろよ」

前野 「当たり前や」

伸太郎 「結果は教えてくれるんやろ？」

前野 「教えへんわ」

伸太郎 「中吉……なんかあつたら連絡しろよ」

前野 「美濃部か、お前は(笑う)」

伸太郎 「(笑う)」

前野 「集会、始まるで」

伸太郎 「おう」

伸太郎、去る。

ちやぶ台の上に腰かける。封がされたままの手紙を見つめる。食堂からは、集会開始の恒例となった寮歌斉唱が聞こえてくる。封を切る。読む。

表情からは特に何かを読み取れる感じはしない。きれいに手紙をたたむ。窓まで歩き、開ける。手紙をゆっくりと裂き、風に放る。

前野、『憧れを知る者のみ、我が悩みを知らぬ』と書く。
書き終わり、二三回うなづく。

前野「うん、よし。よかったんだよ」

前野、コタツの電球を一瞬見つめた後拾い上げ、急にこみあげたどす黒い感情にまかせて床に叩きつけようとする。
がピタリと止まる。少しの間うつむきながら電球をこねる。

前野「ババアがよ。勝手なことしやがって」

と言うが、目は真っ赤である。
暗転。

暗闇の中、遠くで電話の音が鳴っている。

明転すると、部屋には段ボールがいくつも積み上げられている。伸太郎の退去の準備はおおかた済んでいる。

伸太郎はちやぶ台の前で誰かを待っている様子。ちやぶ台の上には、一升瓶と2つの湯呑、ホタルイカを干したものが置かれている。5回鳴ったところで、やや速足で部屋を出る。伸太郎が受話器をとったのであろう、10回目のコールで電話鳴りやむ。ややあつて伸太郎もどつてくる。

と、美濃部が奥の扉から出てくる。どこかに出かけるような服装。といつても薄汚れたジャンパーに毛糸の帽子である。

美濃部 「ごめん、電話」

伸太郎 「いや」

ちやぶ台の上の酒とつまみに気づき、私を待っていたのかとも思うが、あえて気づいていないそぶり。だってこれから出かける用事がある。

美濃部 「ホタルイカ、うまいよな」

伸太郎 「気づいているだろうと」 ちょっと奮発して」

美濃部 「出かける用事があるので」 寒いかな（と窓を見る）」

伸太郎 「雨降るかもって（そんな日に出かけるな）」

美濃部 「電話、誰？」

伸太郎 「斉藤いますかって。もう引き払ったよつって」

美濃部 「そう」

伸太郎 「もう俺と美濃部さんだけです。残ってるの。貸し切りです。」

美濃部 「誰もいないと妙にこわいときあるけどさ、今日はちつともこわくない。なんか今さら愛着わいてるっていうか」

伸太郎 「わかる気はする」

美濃部 「(お酒) 楽しんで」

伸太郎 「バイト？」

美濃部 「そ。学生最後の。」

伸太郎 「卒業してもやりそう」

美濃部 「まあ、バイトに卒業はない」

伸太郎、一升瓶を開け、やや雑に湯呑につぐ。ひとつを美濃部に渡す。

伸太郎「ま、ま、ま、先輩。ほい、かんぱーい！（と妙なテンションである）」

伸太郎が普段よりも強引にグイとくるので、美濃部はやや戸惑う。酒にも口はつけていない。

美濃部「チャリやから」

伸太郎「ではチャリに。（杯をあげて）かんぱーい！」

美濃部「・・・ほな一口だけ」

美濃部、少し口をつけ、湯呑をちゃぶ台に置く。美濃部の手が湯呑から離れる前に、伸太郎かまわず酒を注ぐ。湯呑からあふれる酒。美濃部、手を離すが伸太郎過剰に注ぐ。湯呑からあふれた酒が、ちゃぶ台をつたい、畳にポツポツと落ちる。

その間、「ま！ま！ま！ま！ま！ま！ま！ま！ま！ま！」と伸太郎は言い続ける。

酒を注ぐのをやめ、

伸太郎「・・・まあ今日くらい」

美濃部「・・・」

伸太郎「雨も降るみたいやし」

美濃部「・・・」

伸太郎「飲んでくださいや。最後に。頼みます」

美濃部「・・・帰ってきてからではいかんのん？」

伸太郎「帰ってこん気がする」

美濃部「帰るわ」

伸太郎「いや、美濃部さんがやくて、なんか……俺が。違うか。なんか俺のこう大事な時間みたいなのが」

美濃部「俺ばっかやん」

伸太郎「頼みます」

美濃部「困るわ。行くなって言うてあるし」

また遠くで電話のベル鳴る。しばし沈黙で見つめ合う2人。伸太郎が席を立ち、電話へと向かう。

伸太郎が出ていった後、美濃部は毛糸の帽子をとり、ちゃぶ台に腰かける。ふきんで酒のこぼれた畳をふく。

伸太郎もどってくる。美濃部が座っていることに少し安堵する。

伸太郎 「バイト先。今日は休むと伝えておきました」
美濃部 「この番号教えてないわ。ボケ！」

軽く微笑み合う。向かい合って座る。酒を注ぎ。湯吞を上げて、

伸太郎 「では」

美濃部 「卒業おめでとう」

伸太郎 「おめでとうございます」

飲む。伸太郎、ライターとホタルイカを持ち、

伸太郎 「軽くあぶって食ってください」

美濃部、あぶって一つ食べる。

美濃部 「うん。うまい・・・中吉から連絡あった？」

伸太郎 「いえ」

美濃部 「そう」

美濃部、前野が壁に書き残した言葉を見つめ、

美濃部 「今日はもう行かんの？（出て行かないの？の意）」

伸太郎 「明日の朝出ます。車借りられんくて」

美濃部 「そう。（部屋を見て）片付いたな」

伸太郎 「ええ」

美濃部 「・・・どうですか？」

伸太郎 「なにが？」

美濃部 「出て行く気分は」

伸太郎 「くだんないっすね。くだんない気分だ！」

美濃部 「ね」

伸太郎 「ね、って。あなたはそんなことないでしょ」

美濃部 「なんで」

伸太郎 「なんでって。長くいたし。10年」

美濃部 「なげーな。今年30だ。二浪してるから・・・え、すごくない？」

伸太郎 「すげえすよ」

美濃部 「まいったね」

伸太郎 「どうです、ここを去る気分っていうのは」

美濃部 「・・・まあくだんないんじゃない」

伸太郎 「誤魔化さんで。聞きたいんですよ、僕は」

美濃部 「なんで」

伸太郎 「飲んだんだから話さないよ」

美濃部 「明日、(壁の一角を指差し) あそこにきつと書くからさ、100年経ったら見に来いよ。うめえな、これ。どこの？」

伸太郎 「100年どころか、来週にはもうないじゃないですか、この建物。」

遠くに軽い雷鳴、雨が降り始める。

伸太郎 「・・・僕こう見えて泳げないんです」

美濃部 「へーすげー泳げそうなのねー(と思ってるはずがない)」

伸太郎 「小学生のとき、クラスのボスが熊みたいにデカイゴリラで、そいつが水泳の時間に俺の海パンをプールの中で脱がしたんですよ。俺、狂ったように手足バタつかせたんですけど、熊ゴリラはスルスルっと脱がせて。俺そのうち息ができなくなってプールの底に沈んでいったんですけど、たぶん2秒くらいなんですけど、気失っちゃって。でも、パツと目をあけたときにプールの底から空が見えて、すげえキレイだったんですよ。光がユラユラゆれてて、ああ、あそこにはなんか希望があるなみたい。でも、俺はあそこに行けないんだと思っただけですよ、泳げないから。致命的なカナヅチだから。でもキレイだなーって、生きてるうちに見られてよかったって思いましてよ」

美濃部 「うん(と言ったが言葉が続かず)」

伸太郎 「・・・なんかそういうことなんですかね。そういうことっていうのは、美濃部さんがここから出て行くのは。プールの底からあのユラユラの空の方に浮き上がっていくということですけど。・・・いかがですか？(と言うが、何を聞きたいのか自分でもわからず笑ってしまう)」

美濃部 「うーん・・・私、泳げるからなー(と笑う)。・・・でもそうかもしれんね。光に見えてるかはお知らせ、ぬるい水から出て行くのは・・・そうかもしれんね」

伸太郎 「光だとは思わないんですか？」

美濃部 「思えなくない？思える？」

伸太郎 「・・・俺はですけど、ここを出たらたぶん普通に幸せなんだと思います。普通に仕事して、給料もらって。時間はなくなるんですけど、お金はあるだろうし。なんかそういう希望みたいなのはありますよね。・・・すげえ嫌ですよ、そういうの。20代は仕事でストレス抱えて、たぶん30くらいで適当に子どもつくって頑張るしかなくなって、40くらいで思い出したように「死」について考え始めるんですよ、たぶん」

美濃部 「よくない？それで」

伸太郎「・・・本当に？」

美濃部「いいよ、それで。というか、たぶんそうなるでしょ。どうしたって。逆にそうならん方が悲惨っていうか。・・・うん、悲惨」

遠くで電話が鳴る。顔を見合わせる2人。一瞬の間がありジャンケンを始める。伸太郎が負け、小走りで去る。

美濃部、部屋にもどる。柿の種の大きなボトルを持って来てちゃぶ台に座る。ピーナツを宙に放り投げて食べる。後ろ側に投げてしまい、仰向けに寝転がる格好になる。

美濃部「・・・光ねえ」

伸太郎、もどってくる。

美濃部「これな、今日実家から送ってきたんよ。」

伸太郎「今すか」

美濃部「そ。10年おったから皆さんに、やて。もうその皆さんは巢立ったわ。ワハハ。もらって腐るほどあるけん」

伸太郎「あざす」

伸太郎「：10年おってやり残したことがあります？」

美濃部「大学デビュー」

伸太郎「(笑って) 十分でしょ」

美濃部「出遅れたわ」

伸太郎「じゃあさ、なんで10年もいたわけですか」

美濃部「知らないよ。もうよくない。たぶんおもんないよ」

伸太郎「おもんなくていいんだ、俺は」

美濃部「なんで知りたいんよ」

伸太郎「好きだからですよ」

美濃部「(特に反応はない)」

伸太郎「そういうあれじゃあ」

美濃部「ないよね。知ってるわ」

伸太郎「いや、好きですよ。人として」

美濃部「それはありがとう。私が君なら、結構私のこと好きやと思うわ。ありがとう」

伸太郎「なんでいたんですか」

美濃部「いちやいけないみたいやん」

伸太郎「いや、いてくれてうれしかったですけど」

美濃部「今日ようしゃべるな、自分。」

伸太郎「俺はここを去るなあ、と思って去りたいんですよ。なんかそれを聞いたら、そういう気分になれると思う」

美濃部「大した理由やないし」

伸太郎「言いませんから。聞いたら忘れませうから」

美濃部「しつこいわ」

伸太郎、一瞬黙るが、

伸太郎「…大丈夫ですか？」

美濃部「なにが？」

伸太郎「いや。…大丈夫ですか？」

美濃部「……」

伸太郎「…長かったから。誰よりも。…大丈夫かって僕ら思ってます、よ？」

美濃部「伸太郎、余計な世話焼くな」

伸太郎「何に遠慮してるのか、何なんかようわからんけど。背負おうとしてるものとかそういうの、もう意味ないんじゃないですか。皆いなくなっただし、僕だっただけいなくなるし、この寮だっただけいなくなるんですよ。不自由になろうとしても、もうなれないんですよ。何に對してまごついてはるのかわかりませんが、最後まで腹見せてくれたってええんじゃないですか!？」

少しの間。美濃部、伸太郎を見て、

美濃部「………タバコ、ちょうだい」

伸太郎「吸わんでしょ」

美濃部「吸うわ。たまに」

伸太郎「ウソ。何？」

美濃部「ピアニツシモ？」

伸太郎「女子か!」

美濃部「女子や!」

伸太郎、ヘラヘラ笑って、ハイタッチを求める。ハイタッチ。

タバコに火をつける美濃部。一口吐き出し、

美濃部「強っ」

美濃部、タバコの火をちょっと見つめている。最初の一言を考えているように見える。

美濃部「考えながら話します。：本当にうまくいえんのやけど、いつの頃からか何しても楽しい、
っていう感情がないのね。ゼロじゃないけど、もうすっごく薄い。ほぼない。何かの出来事があ
ってポンとそうなったわけでもないと思う。あれがきっかけかなと思うことはいっぱいあるけど
たぶん違う。気づいたらこうなってた。納得できんよな（と伸太郎を見る）」

伸太郎「（ジツと聞いている）」

美濃部「：年齢？年齢ごとの心の賞味期限みたいなんがあるのかな。箸が転んでもおかしい年ご
ろって言葉あるでしょ。その年ごろのときは「笑えるか」って思ってたけど、今思うときつと笑
えてたのね。箸じゃなくて箸的なもので。

たぶんやけど、小学校出るまでには九九言えないといけないみたいなもの、生きてたらずつと
あるんよ。18までに初恋してないといけないみたい。誰が決めたわけでもないんやけど、あ
ると思うんです。それを通過していくには、環境を変えないといけない。学校入るとか、会社入
るとか。環境じゃないか。新しい人と会わんといかんのか。

ここでの生活が長くなって、私は新しい人に会うこともなくなって、だんだんその通過するべき
ことに遅れだした。最初は焦るけど、まだ大丈夫やろと思ってるうちに、もうみんなずっと遠く
に行ってた。そうするとな、変なこと起きて、：伸太郎。笑ってな。」

伸太郎「（ただ黙って聞いている）」

美濃部「壁の文字が光るったい。おかしいやろ。夜寝ようとする壁の文字が光って見えて。こ
こを巣立った人らが書いた言葉が光ってな、星空みたいに、立派な言葉書いてあって、ふざけた
言葉も書いてあって、だけど、なんかちゃんと通過していった人たちの言葉なのよ。

それ見てるとね、心がキューと小さくなって、みじめなんだな。とつても。

君たちが慕ってくれるのもこわくなってきて、私もちゃんとしたこと言おうと言葉探すねんけど、
全部上っ面。ツルツルなの。（深呼吸し続ける）……井の中の蛙が、蛙であることに気づき、そ
れでも出ることができず、井戸ごとぶっ壊されて、仕方なく外におん出る。：といったところじ
やないでしょうか。終わり！」

とタバコをもみ消す。

美濃部「もう寝よ。：な、おもんなかったやろ。ま、元気でやりや。のう」

去ろうとする美濃部の背中に、

伸太郎「：ねえ、美濃部さん」

美濃部「ん」

伸太郎「僕ら、うまく友達だったですよね？」

美濃部「それはもう、見事なもんやったよ。」

伸太郎「：よかった。それを聞けて。話してくれてありがとうございます」

美濃部 「今書いてーや」

伸太郎 「え」

美濃部 「見たいんよ。あんたがなんて書くか」

伸太郎 「なんで？」

美濃部 「なんでかね。知らん。なんか間違えそうや、あんたは」

伸太郎 「……」

美濃部 「見たいんよ。あー、それを見たら、私も去るんだって思えそうな気がするわ」

美濃部、マジックを放る。

美濃部 「書けや。私も話したんやから」

伸太郎、立ち上がるがまだ決まっていない。部屋を歩きながら、

伸太郎 「………ダメっすわ」

美濃部 「待つよー」

伸太郎 「待たれても、書けないもんは書けない」

美濃部 「そりやそうやけど。．．．なんか、あんたは書かずに出ていきそうや」

伸太郎 「それ、児玉さんにも言われましたわ」

美濃部 「…嫌なんだわ、うち。あんたにはちゃんと出て行ってほしい。ピリオド打たんのは、なんかこうせこいわ。私が言うのもあれやけど」

伸太郎、壁を見て、

伸太郎 「俺の文字も光りますかね？」

美濃部 「お前のなんか光らんわ」

伸太郎 「よかった」

遠くで電話が鳴る。伸太郎、ピクリと反応するが、

美濃部 「ほっといてええ」

伸太郎、それを受け入れて、しばし考える。

伸太郎 「…やりますか、ロックアウト。バリケード2人でつくって。美濃部さんがやるって言ったら、俺たちやりますよ。美月も、中吉も。児玉さんだっけすぐに帰ってきます。ここを通過し

ていった人たちもきつと駆けつけてくれます。全国のOB・OGだって。機動隊の隙をかくぐり救援物資を投げ込んでくれる人も出てくるはず。美濃部さんがやるって言ったら、本当にできます」

電話のベル、いつのまにか止んでいる。

伸太郎 「どうしますか？」

美濃部 「…ありがとう。やめとくわ」

伸太郎 「そうですか…」

美濃部、息を吐き、

美濃部 「いたら書きにくそうやし、寝るわ。明日見させてもらおうね」

伸太郎 「はい」

美濃部 「じゃあおやすみ」

伸太郎 「おやすみなさい」

美濃部、自分の部屋へと去る。

伸太郎、マジックのキャップをとり、書き始める。

その中でゆっくと暗転。

午前である。9時ころだろうか。早春の穏やかな日差しが差し込んでいる。

部屋はもうすっかり片付いている。残っているものは勉強机・ベッド・ちゃぶ台など、もともからこの部屋にあったものだけで、伸太郎の私物はすべてなくなっている。

昨日までと違うのは、壁に新たな言葉が加わっていること。

『正を履んで怖るるなかれ』 伸太郎が書き残したものだ。

美濃部の部屋から鼻歌が聞こえる。「涙くんさよなら、さよなら涙くん、また会う日まで」。箒で伸太郎の部屋も掃きに来る。壁の伸太郎の文字を見る。

掃除を続け、ベッドの下を掃くと、何かある。ひっかけて手繰り寄せるとあの古い電球である。それをちゃぶ台の上に乗せる美濃部。

美濃部、2段ベッドの上にあがる。そこから部屋を見つめる。居住まいをただし、二礼二拍手一礼。

美濃部 「…よし」

というが、顔を上げない。

美濃部 「本当に一番最後になってしまったわ。」

美濃部、顔を上げ、部屋全体へ。

美濃部 「…一世紀、よう住まわせてくれました。お世話になりました」

と、何かに頭を下げお礼を言う。

美濃部 「…何を書いても、誰も見らんのですが、最後に書かせてもらいます」

美濃部、ベッドを降りる。

壁を見る。渡辺、兎玉、前野、伸太郎の言葉を見る。

マジックを手にし、書き始める。一瞬迷う。が、書く。

『生き急げ』

と書くが、付け足して、

『君は生き急げ』

少し震えている。それでいいのか？本当にいいのか？と自分に問う。が、何かをあき
らめて、あるいは何かには納得しマジックのふたをしめる。

そのときちやぶ台の上の電球に灯りがともる。最初はジツクリとだんだん炎のように。
美濃部はそれを見てはいない。しかし電球の灯りとシンクロするかのようには、だんだ
んと呼吸が荒くなる。すると、壁の文字が激しく光り始める。壁の文字の光と、電球
の光にさいなまれる。美濃部、さらに苦しむ。

ハーハー………ゼーハーゼーハーゼーハー！

美濃部、はうようにして窓まで行く。窓を開ける。風とその風に吹かれて大量の桜の
花びらが部屋に入ってくる。揺れるカーテン。壁の文字の光、消える。

窓枠にひじをついたまま二三度深く呼吸をする。空気が体にしみわたっていく。窓の
外に咲く桜を見ながら、

美濃部「春や。さよならや。」

美濃部、ゆつくりと脚に力を入れ立ち上がる。部屋を振り返り、ポツンと残された電
球が目がいく。もはや光っているのは電球だけ。何かそこに残っていることがひどく
不自然に見える。軽く憎たらしく思う。美濃部、ちやぶ台まで歩き電球を手取る。
そして窓の外に投げ捨てる。

地面に落ちて軽やかにわれる音。そして誰かの声。

誰か「なっ！あぶねえ！おい！誰や！！」

美濃部、窓に駆け寄り、

美濃部「すまん！すまん！うちや！怪我せんかったか？」

誰か「美濃部さんでしたか！大丈夫です！」

美濃部「ほんますまん……バイトか？」

誰か「いやー、新学期の科目登録に行くんですわ！」

美濃部「そうか！気つけてな！」

誰か「もう行くんですか？」

美濃部「おう、もう出るところ。色々世話になったね。みんなにもよろしくな」

誰か「そんなんさみしいやないですか。駅まで荷物持ちますわ」

美濃部「そうか。すまん。じゃあ下行くわ」

美濃部、窓を閉め、奥の扉から自分の部屋へと消える。

手荷物をもって出てくる。

壁の文字に、『私は歩く』と書き足す。

にんまりと笑い、大股で歩き出す。

先ほどの誰かがトラメガで叫んでいる声が聞こえる。

誰かのトラメガ「えー、我らが美濃部の親分の旅立ちでございます！全元寮生、お世話になった皆々はただちに寮に集合！」

美濃部の声「そんなんやめろやー」

と言うが、嬉しそう。

集まってきた寮生たち、はなむけに寮歌を歌う。桜が舞う。そして寮を解体するようなブルドーザーの騒音がフェードインしてくる。美濃部の声、先ほどよりも遠くなり、

美濃部「達者でなー！」

その遠くなる声に合わせてゆっくりと暗転。

【終】